

	<p>第130号 2005年10月</p> <p>〒733-0032 広島市西区東観音 8-10</p> <p>ワールド・フレンドシップ・センター</p> <p>理事長 森下 弘</p> <p>TEL (082)503-3191</p> <p>FAX (082)503-3179</p> <p>E-Mail wfc@ma7.seikyoku.ne.jp URL</p> <p>http://ha7.seikyoku.ne.jp/home/wfc/index2.html</p>
---	--

私たちは何を祝ったのでしょうか

ドン&ポーリン ヘス



四十周年を記念して演奏して下さった広島コーラスのみなさん

ちょうど3ヶ月前に私たちが着任して以来、WFCの40周年記念祭の実施に向け細かく準備調整するのに多くの時間をかけた理事、クラス会員、支持者らのあふれる情熱とエネルギーを毎日思い出しています。

何を祝う計画を立てていたのでしょうか？ 勿論、1965年8月にバーバラ・レイノルズと少数の支持者がWFCを創設し、40年間運営と奉仕を続けてきたことを知っていましたし、バーバラが核兵器廃絶と世界平和のために生涯をささげたことも知っていました。しかし、会う機会すらなかった多くの人々にまで彼女が及ぼした影響については、私たちが広島に来るまで知りませんでした。今日までバーバラの夢を生かし続けている献身的な人々がいることを知って目を

みはっています。原爆の恐ろしい歴史上の出来事について個人個人の経験を共有する被爆者の話を聞いて驚いています。知識豊かな平和公園碑めぐりボランティアが説明するのを聞いて感動しています。WFCに奉仕された前館長達に会ってやる気が沸いてきました。ゲストを迎えてもてなし、WFCの話を共有し、原爆資料館を訪れたゲストの感想を聞くことは、私達の職務の重要な部分です。更に大切なのはそれが、戦争や平和の、一人一人が個人の責任について振り返ってみる場所を作る、というバーバラのビジョンが今もセンターで実現している証だからです。

WFCの創立記念日には、ブレザレンボランティアサービス(BVS)常任理事会の代表者、WFCアメリカ委員会、ウイルミントン大学、クエーカー代表団及びWFC前館長らがお祝いに来られ、それぞれにWFCの功労を認めて頂きました。これらゲストの感想はこの号の他所に載せてありますので、ここでは国際平和都市でWFCの仕事を続けている人達について述べることにします。WFCの理事、クラス会員、支持者らは、バーバラの残した遺産を確実に継続していくために非常に多くの時間と資金を使いました。40周年記念委員会は予算と戦い、招待者名簿の作成、宿泊の手配、夕食やバスの段取り、その他のこまごました仕事をしました。森下理事長は40周年記念誌の編集責任者として、空先生や車地さんの助言を受け、翻訳クラスの協力を得て出来た記念誌の草稿を、式典の時に紹介されました。40周年を刻む思い出として、遠からず完成されるでしょう。多くのゲストのた

めに平和公園を案内したピース・ガイドに、そしてWFCで60人もの人達に被爆体験を話して下さった空先生に感謝します。

クラスメンバー、その他大勢の人々が陰で協力をしました。水曜日クラスは鶴を折り、金曜日クラスは灯籠を作り、その他の人達は集会室の飾りつけ、食物の持参、交通の手配、そして絶対に欠かせない後片付け、清掃まで頑張りました。

ポーリンと私は、着任前から始まっていたこの大仕事を引き継ぎました。そして出来るところは貢献しました。私たちが到着した日から協力の精神に満ち溢れていました。そしてWFCを今日まで責任を持って続けてこられたボランティアの献身に驚いています。前館長夫妻に会い、私たちの先輩として「情報交換」し、そして記念行事の間、WFCでマクファデン一家をもてなすことが出来て嬉しく思いました。

私たちの祝ったことは？ 私たち一人ひとりが戦争と平和についての責任に思いを致す場所として創立されたWFCのこれまでを祝い、又輝かしい未来を祝ったと信じています。私たちはこの献身的なファミリー、WFCで奉仕できることを名誉なことと思っています。

キャンビー・ジョーンズ教授 バーバラ・レイノルズとの思い出

オハイオ州ウイルミントン、ウイルミントン大学の宗教、哲学の名誉教授(既に退官)キャンビー・ジョーンズ教授は、2005年8月7日のWFC40周年記念式典においてスピーチをされました。彼は1971年、76年、79年と既に3度来日し、フレンドシップセンターも訪れていて、センターの創立者バーバラ・レイノルズそしてフレンドシップセンターとの係りは長く、それら

思い出の一端として、次のようなことを話されました。



オハイオ州ウイルミントン大学の元宗教学、哲学の教授であるキャンビー・ジョーンズ氏は、8月7日の式典のキーパーソンでした。(通訳: 山下美枝子さん)

ジョーンズさんのバーバラとの最初の出会いは1971年。次に1974年バーバラがアメリカへ帰国した時から改めて交流が始まり、ジョーンズさんが教授をしていたウイルミントン大学に平和文庫(Peace Resource Center)が創設されるが、その実現は、彼に負うところが大きかった。彼はこのウイルミントン大学平和文庫の助言委員会の責任者となり、今回も現在のPeace Resource Center ディレクター、ジム・ポーランドにかわって来広した。ピースリソースセンターは、単に反核や平和関連資料などの文庫であるばかりでなく、インディアナ、イリノイ、西部ペンシルベニア、ミシガン、ウエストバージニアなど各州で、中学生、高校生を対象にピースメイキングのワークショップを行っている。このワークショップというのは参加した学生達に、どのようにして怒りを静め、気持ちを落ち着けるか、暴力ざたになりそうな、或いは既に暴力沙汰の状況において平和的解決をいかに生み出していくかを教える活動である。暴力行為は避けられ、相互に信頼が生まれ、憎悪は友愛に変わる。学校全体が和解の雰囲気へ向かうケースもある。こうしたワークショップは、ピースリソースセンターの主軸となり、ウイルミントン大学の素晴らしい付属プロジェクトとなってきている。その任に当たる教師養成は、同大学の主要プログラムの一つであり、これらワ

ークショップの長期的効果は無限ともいえる。

ピースリソースセンターにおけるバーバラの思い出は尽きない。1974年、彼女は原爆資料のぎっしり詰まった6個のダンボール箱を携えてやってきた。当初はまず大学の寮に落ち着き、その後キャンパス向い側の、大学事務局の仮宿舎であった家に移った。その家は、今も大学のピースリソースセンター本部である。センターの長となって最初のバーバラの大仕事は、1975年8月4日から7日まで開催された原爆投下30周年の会議を組織することであった。20名を超える日本側代表が、医師の原田東岷氏に率いられて参加、その多くは平和教育の教師達であった。閉会式は、手と手を繋いだ大きな人の輪が大学の鐘の塔を囲み、広島長崎の犠牲者の冥福を祈って20分間の黙禱をささげるというものであった。「今度の会議でのクライマックスはあの黙禱をささげる人の輪でした」と、原田医師は後でジョーンズ氏に語った。

ジョーンズさんによれば、バーバラは1980年代カリフォルニアで娘のジェシカさんと一緒に暮らした時期もあったが、1990年クリスマスも間近という時期に使命感から再びウィルミントンへ戻ってきました。そして直ちにピースリソースセンターの仕事に取り組んだのです。1990年2月11日、週末でミンガン州アン・アーバーから彼女の息子さんが訪ねてきて、その日の午後二人は一緒に映画を見に行きました。その帰り、彼女のアパートのそばまで来て車を止めたとき、車中でバーバラは倒れ、午後9時半に亡くなりました。病院の救急救命室へ直ちに運ばれたが助かりませんでした。彼女の遺言により、火葬に附され、灰はオハイオ州イエロースプリングスに散骨されました。我々の親愛なる友人であり、創立者であるバーバラ・レイノルズは、平和の証人たる偉大な人生の幕を閉じ帰らぬ人となりましたが、彼女のビジョンは死ななかつた。40年前に創立されて以来、ワールドフレンドシップセンターは世界平和への一条の光とな

り、核エネルギーや核兵器に反対するのみならず、あらゆる暴力、戦争には理由の如何を問わず“否”を貫き通してきました。

結びに、ジョーンズさんはこう語っています。「イエスは来たりて平和を説いた。近くから来た者にも、遠くからの者にも。そして敵同士を、新たな一つの人類へと和解させた。ワールドフレンドシップセンターは、それと同じように平和の証人であり続けてきた。今後とも変ることなく、人類に平和と調和をもたらす、たゆまぬその努力に祝福がありますように」

ワールドフレンドシップセンター創立40周年記

—アメリカのゲストから感謝の言葉をいただく—



マリアン・アルバートがブレズレン教会から贈られた世界地図をプレゼント。地図を持ってきているのはマクファーデンさんのの子どもたち。(通訳:平岡幸子さん)

この度、ワールドフレンドシップセンターは、アメリカからたくさんのゲストを迎えて創立40周年の祝賀行事を行いました。ゲストの方々からは、個人として、また職責として、ワールドフレンドシップセンターの働きに対する感謝の言葉が寄せられました。

ブレズレン全教会を代表して出席されたブレズレン・ボランティアサービス(BVS)ディレクターのダン・マクファドンさんからご挨拶をいただきました。WFCは長年にわたってブレズレンからボランティアの館長

をアメリカより派遣してもらっています。また、ダンさんからは、WFCに世界地図の贈呈がありました。WFCの世界地図には、海外から訪れるゲストの方々の国に印が付けられますが、古くなって色あせてしまったために、新しい地図を贈ってくださったのです。今回は、ダンさんにとって初めての日本訪問でした。WFCへのボランティア館長派遣や、また他の国で働くボランティアの仕事の場を確保するという責務を負っておられます。ダンさんの家族も一緒に来広し、WFCに泊り、資料館に行ったりWFCのピースガイドの案内で平和公園の碑めぐりをしたりして、これまでWFCに滞在した多くのゲストたちと同様の経験をされました。

ダンさんは、また、WFCの働きを覚えてブレズレン教会が承認した、次のような決議案を紹介されました。

「WFCが広島に創立されて40周年を迎えたこの記念の時にブレズレン教会常任理事会は、WFCが平和活動の一環として原爆被爆者の体験を伝え、世界の人々との友情をはぐくむためのたゆまぬ努力をしておられることを讃えるものである。ブレズレン教会は、長い間、BVSを通してWFCと協力し合ってきた。我々ブレズレン教会は、原爆によって壊滅した広島の灰燼の中から誕生したWFCの、あらゆる宗教、信条を超えた貴重なあゆみは慶賀にたえない。今日に至るまでのWFCの働きに敬意を表すると共に、今後も、核兵器のない、戦争のない世界の創造を目指して、共に力を尽したいと願うものである。」

祝賀行事には、沢山の元館長達がアメリカからはせ参じました。メリーアン・アルバート、ジョエル&ベブ・アイカンベリー、デイビッド&エビー・パーチェ、リズ・バウアー、そしてエドワード・ダカティーとベス・ベントリー。それぞれに、WFCで過ごした忘れがたい思い出を語られました。館長在任中の貴重な体験が、次のようなコメントの中にもうかがえます。

メリーアン・アルバート、WFCアメリカ委員会委員長は、ブレザレン教会寄贈の壁地図用に、フレームを購入する志を贈呈し、WFCが40年にわたり国籍を超えて友情を育む場所を提供してきた、今後もずっとバーバラ・レイノルズの理念の継承を願っていると述べました。



現館長・元館長が思い出を語り合う

ジョエル&ベブ・アイカンベリーは、一ヶ月前のブレザレン年次大会で、出席したメンバーの皆さんによって折られた1200羽以上もの折り鶴を持ってやってきました。彼らは、WFCでの体験を通して感ずるところも多くその生活が変化したと語りました。

デイビッド&エビー・パーチェ。WFCは特別な所、とその思い出を語られました。友情がはぐくまれ、その友情が育ちも試されもする所であり、また時間、エネルギー、能力を友情やとくに平和のために貢献する場であると。

エド・ダカティーとベス・ベントリー。広島在任中に学んだ色あせることの無い教訓が一つあります。それは、世界中で恐ろしい事件が起こっているこの時代、最も力強いものは愛と希望である、ということ。希望のテーマは世界各国から人が訪うWFCの仕事の中に、そして我々の心の中に、力強く有りつづける、と話されました。

リス・パウアーは、同伴できなかった彼女の夫ボブの挨拶を伝え、彼等の日本滞在を有意義なものにしてくれた生徒たちとの思い出を語りました。

キャンビー・ジョーンズ博士は、オハイオ州にあるウイリントン大学の名誉教授であり、またバーバラ・レイノルズの長年の友人でもあります。同大学のピースセンターにおけるバーバラの業績について述べられました。(別記事)

参加できなかった他の館長たちは彼等のWFCでの思い出を寄せられました。そのメッセージは、まもなく出来あがる40周年記念誌に掲載されます。世界中に友愛の架橋を渡してきたWFC代々館長たち、在任中のそのハードワーク、他に類を見ない献身的貢献には深く感謝しています。

ジェシカさん来訪

WFCは9月21日と22日に創立者バーバラ・レイノルズの娘のジェシカ・レイノルズ・レンショウさんを迎えて喜びに溢れました。Californiaのロング・ビーチに住んでいるジェシカさんとご主人のジェリーさんは広島に来られセンターに2泊されました。理事の人達が歓迎会を開き、ジェシカさんをよく知る理事も、初めての理事も、20名以上が集まり、彼等と交流を深めました。

ジェシカさんにとって、1995年以来の来日でしたが、それから後の最近までの忙しい生活の様子を語ってくれました。前のご主人のエリックさんは亡くなられ、1年前にジェリーさんと結婚されました。ジェシカさんはフリーランサーの執筆者で、彼女の記事は新聞とか雑誌に度々掲載されています。また3冊の本の著者でもあります。まだ幼い少女だった時に、家族と一緒にヨットでの世界一周の航海、バーバラの平和への情熱など、いろいろと体験を語ってくれました。バーバラは人間が好きで、神の啓示により平和運動

をし、WFCを創立するまでになりました。ジェシカさんはバーバラに多大な影響を与えた彼女の3冊の愛読書を贈呈してくれました。それらはルース・ベネディクトの「菊と刀」、賀川豊彦の「愛の科学」と「聖霊に就いての瞑想」です。バーバラはこれらの本にとっても共鳴し影響されたそうで、センターの蔵書に加えられました。

原爆資料館、平和公園の碑巡り、子供時代に広島で育ったゆかりの地の訪問、バーバラが平和活動をしていた初期の頃、平和巡礼の旅に参加した旧友たちとの再会など、広島での日程は旋風のごとく忙しいものとなりました。ジェシカさんはまた水曜日の夜の英語クラスでも広島での幼少時代の話をしました。平和公園ではブレズレン教会の大会で折られた1200羽の千羽鶴を原爆の子の像に捧げました。ここから長崎に向かい、バーバラと親交のあった人々に会い、それから京都、東京、長野に行き、帰国の途に着きました。ジェシカさんは私たち皆の親切なもてなしに感謝され、次のような言葉を残されました。「本当に感謝しています。母もちろんそうだと思います。WFCが40年以上も訴え続け、過去にヒロシマで起こったことや、広島の人々が体験したことを受け継ぎ、そして、そのようなことが再び世界のいかなる場所にも起こりえない未来を築くことに貢献してきたことに感謝しています。あなたがたは過去と未来に橋を架けることに重要な役割を担ってきました。皆様に神様のご加護がありますように。」



理事・スタッフによるジェシカさん、ジェリーさん歓迎パーティー

ジェシカさんは、次のような詩も私たちに残してくれました。それはバーバラが亡くなった後の1990年の原爆記念日に作られたものです。

1990年のヒロシマ・デイ

母の死の後で

また再び、この墓地に
亡骸はひとつもなく
今は芝生が広がり
折りたたみ椅子が連なる
私たちは敬虔に座る
朝早くから
そして扇子で
火炎を振り払う

蝉だけが鳴き
きこ雲が
上る
敵国の女や子供たちが起きるころ
記憶もまた湧き起る
のどをつまらせそうに
そんな廃墟の光景が蘇える

彼女は一緒に焼け焦げはしなかった
しかし、彼女はここにいた
彼女の魂は、他の人々と一緒に
この墓地に眠っている
人々の恐怖と、濁きと
苦しみのすべてが
私の新たな悲しみとともに
私の中で張り裂ける

ジェシカ・シェイパー

スティーブ・リーパー氏 WFC フレンドシップアフタヌーンで講演

9月25日の WFC フレンドシップアフタヌーンは、

スティーブ・リーパー氏をゲストスピーカーにお招きしました。彼は、広島市の秋葉市長より“平和市長会議”のアメリカ代表に任命されている人です。スティーブは1984年広島に来て、1986年小さな翻訳とコンサルティング会社、トランスネットを興し共同経営者となりました。12年間自動車業界のコンサルティングに携わり、その後1998年に Global Peacemakers Association (GPO) の立ち上げにかかわり、平和活動家となりました。2001年には広島を後にジョージア州アトランタに帰り、GPO アトランタを設立。その年、“平和市長会議”のアメリカ代表となりました。



スティーブ・リーパーさん、市長会議アメリカ代表として WFC で話す(通訳: 澤田美和子さん)

WFC には30人程度が集い、スティーブの核兵器廃絶への熱い思いに耳を傾けました。

昨年夏秋葉市長は、2005年10月開催予定の国連総会第1委員会に特別委員会を設け、核兵器の管理、廃絶を達成する為の計画、議論することを提案しました。このアクションが国連の日が始まる軍縮週間のキャンペーンとなり、第1委員会を通じて国連の強力な支持の持続を目指し焦点を合わせているのです。第1委員会は全会一致の必要はなく、投票により決定がなされます。第1委員会内にこの小さな特別委員会をもうけるという決議案への支持は高いようです。

核廃絶に焦点を当てたキャンペーンは、平和をアピールするロンドンでのロックコンサートを始めとして多くの特別イベントが続くでしょう。国際司法裁判所が、核兵器の使用は国際法違反と述べてから既に10年、これを記念してオランダのハーグで10万人規模の核兵器反対デモのキャンペーンが計画されています。

秋葉市長の核兵器廃絶キャンペーンに関する国連軍縮会議でのスピーチ以来、“平和市長会議”への参加都市の数は500弱から1155強に増えています。2005年5月ニューヨークでの平和ラリーには4万人が参加しました。“United for Peace and Justice”にひきいられ、広島から被爆者を始めとする人々、平和市長会議のメンバーらが続きました。

館長、長崎を訪問

ドン&ポーリン・ヘス



末永浩さん(右)、関口良雄さん(左)がヘス夫妻の長崎旅行をエスコート。

8月24、25の両日私達は長崎へ行き、平和公園、資料館を訪れる機会に恵まれました。WFCの友人である関口良雄さん、末永浩さん、高原弘子さんらにお会いし、美しい街を案内して頂いたお陰で、沢山の記念碑や歴史的建造物などを訪れ見学できました。69才の被爆者、末永浩さん(アメリカへのPAX

チームの一員)に案内されて長崎の歴史をいろいろ学びました。

平和公園を訪れている時、報道のインタビューを受けましたが、これはWFCの40年にわたる素晴らしい仕事の一端を披露するまたとない機会となりました。バーバラ・レイノルズを始めとし、今日まで続くその主要な活動、被爆者の証言、ピースパークガイド、PAXプログラム、そして外国人宿泊者の接待など話しました。インタビュー記事は長崎新聞にのりました。

私達はこれらWFCの友人達の自宅に招待され、泊めていただいて沢山の日本の習慣にふれる事が出来ました。それは楽しい旅行で、これ以上ないほどの歓待を受けました。末永夫人は日本の楽器、琴の演奏でもてなし、美しい家、庭を案内し、典型的な日本の朝食で私達の滞在を締めくくりました。

高原夫妻は、引退された医師のご主人と共に夕食に招待してくださり、家や庭を、そして高原氏のご兄弟の手になる本職の、長崎のビデオを見せてくださいました。ポーリンは、名高い日本の茶の湯の手ほどきを一つ一つ受けました。ここでも又、素晴らしい日本の朝食をご馳走になりました。

この旅行でお世話になった長崎の皆様方、そして色々手配をしてくださった理事の皆さんに心から感謝しています。いつまでも忘れる事はないでしょう。

友愛ボランティア

翻訳 平本隆子、堀益芳子、佐久間佳子
山下美枝子、山根美智子
編集 英語版 ドン ヘス
日本語 浜井道子

被爆証言



松島圭次郎さん、オーストラリアの学生に被爆証言をする

WFC 来訪者



Grotten MA ジャズバンドの学生たち WFC を訪れる



空さん、タイの学生に被爆証言をする



クエーカーのフレンズが WFC に滞在、平和公園、資料館を訪れる



ドン館長、ロサンゼルスからの先生たちに話をする



金曜日クラスのみなさんが灯ろうづくりをしました